

武者小路実篤

1885年（明治18）5月12日～1976年（昭和51）4月9日（満90歳没）

小説家・詩人・画家・劇作家・貴族院勅選議員。文化勲章受章者、名誉都民、日本芸術院会員。呑気な樂天家。理想主義者。白権派の中心人物。「新しき村」主宰者。

1885年（明治18）0歳、5月12日、子爵武者小路実世と勘解由小路資承の影響をうけ、千代田区一番地に藤原北家の支流の閑院流の末裔の公家華族の家に生まれた。五人の兄姉は生後早く亡くなり、6歳の姉伊嘉子と3歳の兄公共の2人しかいなかつた。

1887年（明治20）2歳、10月、父肺結核で死去（享年36歳）

1891年（明治24）6歳、学習院初等科入学。

小野鷺堂、華族女学校

（現、学習院女子高等科）教授となる。

1897年（明治30）12歳、学習院中等科入学。癪癱持で負けず嫌い。虚弱。

1899年（明治32）14歳、12月、姉死去。体操、作文、図画、唱歌は嫌い。

1903年（明治36）18歳、母の弟勘解由小路資承の影響をうけ、

トルストイを読みはじめる。

1904年（明治37）19歳、2月、日露戦争勃発。

1906年（明治39）21歳、学習院卒業。東京帝大文科社会科入学。

1907年（明治40）22歳、大学中退。10月、志賀直哉と雑誌『白権』

自費出版。

短編『芳子』執筆。

1908年（明治41）23歳、4月、『荒野』自費出版。短編『芳子』執筆。

尾上柴舟、女子学習院教授となる。

1909年（明治42）24歳、10月、初の脚本『或る家庭』

1910年（明治43）25歳、2月、『お目出たき人』脱稿。

4月、『白権』創刊。

1912年（明治45／大正元年）27歳、竹尾房子（20歳）と結婚。

1914年（大正3）29歳、春、下二番町に転居。8月、『死』を

漱石にすすめられて「朝日新聞」に発表。

竹尾房子（子身に自由奔放の大学男学生）

1915年（大正4）30歳、1月、鵠沼に転居。9月千駄ヶ谷へ越す。

1916年（大正5）31歳、夏、小石川。暮れに千葉我孫子に移住。

1917年（大正6）32歳、12月、漱石没。多量の反戦論を書く。

1918年（大正7）33歳、7月、機関誌『新しき村』創刊。

1919年（大正8）35歳、11月、同志19人と宮崎日向で、「新しき村」の建設に着手。

1920年（大正9）35歳、川南村に第一の新しき村建設。

1922年（大正11）37歳、房子と離婚。有島武郎心中。

1923年（大正12）38歳、8月、『白権』廃刊。（全部で160号が発刊された。）飯河安子と結婚。

9月1日、関東大震災、千代田区元園町の家全焼。

12月、長女妙子誕生。絵を描き初める。

1925年（大正14）40歳、2月、次女妙子誕生。

4月、治安維持法制定。6月資承死去。

12月、兄がルーマニア公使となる。村を離れ奈良に移住。真杉静枝と出会いう。



長女新子
妻安子
大正13年
若い頃、事
方に師に画
本格的に画
を学んだ。



房子（右）と安子
大正12年春



竹尾房子（子身に自由奔放の大学男学生）

「白権派」は、自然主義にかわって、1910年代の日本文学の中心であった。参加した多くの作家が学習院出の上流階級の青年たちであつた。彼らは、人間を肯定し、個人主義、自由主義、人道主義、理想主義を基調にした作品を制作し、明治の武士的な精神（その象徴が学習院院長であった乃木希典である）に反発し、軍人嫌いでもあつた。

「白権」は学習院では「遊惰の徒」がつくった雑誌として禁書にされたという。彼等はロダンやセザンヌやゴッホらを紹介し、美術界にも大きな影響を与えた。

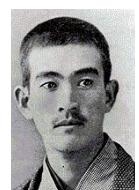
武者小路実篤・志賀直哉・木下利玄・有島武郎・有島生馬らが主導したが、武者小路実篤が思想的な中心人物であった。

「新しき村」は、人道主義的理想（ユートピア）の実現を目指して設立された生活共同体の村。その精神は、自己犠牲に対する一定の義務労働を分担して衣食住が無料で得られる社会、みずから労働による自由を楽しみ、個性を生かせる社会をめざした。

新しき村の運動に対し、社会主義者の山川均や堺利彦は夢想主義に終わるといい、河上肇は失敗するだろうと予言し、有島武郎は同情しながら批判した。当時の人々の関心は、人道主義の理想よりも科学的社会主义の方向に移行していく。



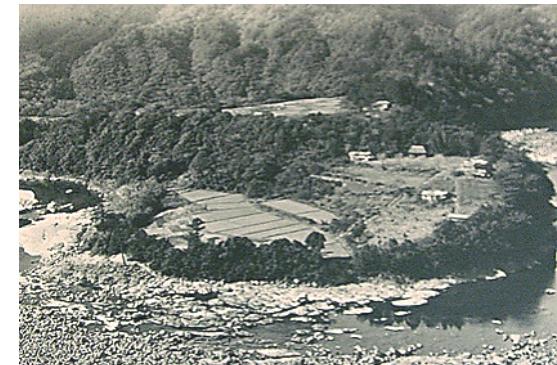
『白権』創刊号表紙
実篤による漱石の『それから』の評論
が掲載された。



志賀直哉



武者小路実篤
承爵。日由主家子家当代。第10院議員
叔父、北勘解由（第10院議員）
華族、原流路家（第10院議員）
藤野小（貴族院議員）



1935年（昭和10年）の日向の「新しき村」ダム建設前

「お互いが人間らしく生き、むつみ合いそしてお互いの個性を尊重し、他人を傷つけることなく、しかも天命を全うすることができる理想郷、いわば調和的な共同体をめざす」「理想的な調和社会・階級闘争の無い世界の実現をめざす」



実篤書「新しき村の精神」扁額

房子は日本女子大出身の「新しい女」の一人だつた。村の男とつぎつぎと自由な恋愛を楽しみ、実篤に世話になりながら村の内外で男と暮らした。安子は大阪から入村するため家出してきた。実篤は安子に一目惚れし、房子と別れて、安子と結婚、村を出て、村外会員になつた。その後、房子は年下の杉山正雄と再婚し村で暮らした。杉山が実篤の養子になつたので房子は再び武者小路姓になつた。村外会員になつた実篤は生涯にわたり物心両面で村を支援し続けた。



晩年の母
秋子

1926年（大正15／昭和元年）41歳、12月、和歌山に転居。
1927年（昭和2）42歳、2月、東京小岩井村に転居。
1928年（昭和3）43歳、1月、麹町下一番町に転居。
1929年（昭和4）44歳、2月、「東京新しき村会場」を有楽町に作り、毎月展覧会などを開催。
4月、「大調和」創刊編集。
円本ブーム



真杉静枝

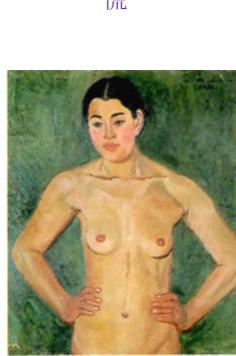
美貌の女流作家 実篤のこと蚊妻いく妻を「夕方になれば、白い蚊の中へ自分を残していく男」だったと述べている。

1929年（昭和4）44歳、個人雑誌「独立人」創刊。プロレタリア文学隆盛

美を帳子の待つ家へ戻っていく男」だったと述べている。
4月、牛込八幡様わきに転居。
11月、母亡くなる。三女辰子誕生。



1930年（昭和5）45歳
新宿下落合の自宅
で、左から次女妙子、
実篤、長女新子



実篤筆「裸婦」油彩



実篤筆「南瓜」昭和2年
21.5×27.0 cm 最初の油絵

1931年（昭和6）44歳、夏、市外の砧村へ転居。

4月、市外の下落合に転居。
5月、第四回国画会展覧会に二点が入選。

1932年（昭和7）46歳、11月、市外の祖師ヶ谷に転居。

12月、神田表猿樂町に美術品販売と出版の店「日向堂」経営。

1932年（昭和7）47歳、杉山正雄、実篤の養子となる。後、房子と結婚、夫婦で日向の「新しき村」に住む（昭和14年から昭和43年まで29年間）、

村には2人だけで住んだ。この頃、真杉静枝と別れる。

1933年（昭和8）48歳、3月、市外吉祥寺鶴山小路に転居。岸田麗子「新しき村」東京支部を出る。プロレタリア文学の退潮。

4月、国画会会友。画業本格的になる。

1934年（昭和9）49歳、1月、吉祥寺日向小路に転居。

4月、國画会会友。画業本格的になる。

1935年（昭和10）50歳、1月、吉川日向小路に転居。

4月、国画会会友。画業本格的になる。

1936年（昭和11）51歳、4月、欧米へ旅行。パリでマチス・ピカソ・ルオードランに会い、上海で魯迅に

会う。12月12日、帰国。ベルリン・オリンピックの取材以外、すべて自前。旅行中体験した人種差別の屈辱によつて、実篤は戦争支持者となつてゆく。



51歳
ル
実篤
ハグ
バス
の中で

「…字が一番、主觀的で、實力的だ。油絵をかく時が、一番らくで、日本画をかく時は、それより息苦しく、字をかく時が一番苦しい」
(実篤『書に就いての雜感』から)

1938年（昭和13） 53歳、ダム建設のため「新しき村」の農地の大半を失う。村人は当時20人ほどいたが、2家族だけが「東の村」に移り、そのほかは離村した。

房子と杉山は残る。

国家総動員法制定。

1939年（昭和14） 54歳、9月、埼玉県入間郡毛呂山町に「東の村」を建設。

第二次世界大戦勃発。

1940年（昭和15） 55歳、3月、『愛と死』菊池寛賞。

9月、牢札に家を買い転居。大政翼賛会結成。

1942年（昭和17） 57歳、5月、文学報国会劇文学部長就任。

『大東亜戦争私感』で、実篤は戦争を賛美する。

1943年（昭和18） 58歳、春、中国旅行で占領下の実態を知り、「日中一体觀」崩壊。

1945年（昭和20） 60歳、5月、秋田県稻住温泉に疎開。敗戦。8月末帰京。

1946年（昭和21） 61歳、3月、勅選議員任命。7月、G項該当、公職追放。

「マッカーサー元帥に寄す」（『新生』1月1日号）で、戦争に敗けて良かつた、と言つてはいる。

1948年（昭和23） 63歳、7月、「心」創刊。東の村「財団法人新しき村」となる。

1950年（昭和24） 64歳、6月25日、朝鮮戦争勃発。

1951年（昭和26） 66歳、8月、追放解除。

11月、文化勲章授与。三鷹市名誉市民に。

1952年（昭和27） 67歳、4月、芸術院会員再選。

1954年（昭和29） 69歳、京王線仙川駅近くに泉と池のある土地千坪購入。

1955年（昭和30） 70歳、12月、調布市仙川に新居を建てて移住。

1956年（昭和31） 71歳、1月、新宿伊勢丹にて個展。高村光太郎没（73歳）

1958年（昭和33） 73歳、11月、「新しき村四十年記念祭」九段会館で。

1965年（昭和40） 80歳、5月、東京都名誉都民を贈られる。

1971年（昭和46） 85歳、2月、『三島君の死』10月、志賀直哉没（満88歳）

1976年（昭和51） 90歳、1月、安子を見舞い、その病状にショックを受け、翌日、脳卒中の発作を起こし、言葉を失う。

2月、妻、安子死去（75歳）

4月9日、安子の死を知らぬまま、脳卒中で没（満90歳11ヶ月）



「心」武者小路実篤追悼号（昭和51年7月号・平凡社）

1979年（昭和54） 「武者小路実篤記念 新しき村美術館」が開館。

1989年（平成元年） 10月、実篤の理解者は自分だけだと自惚れながら、房子死去（97歳）



昭和22年（62歳）

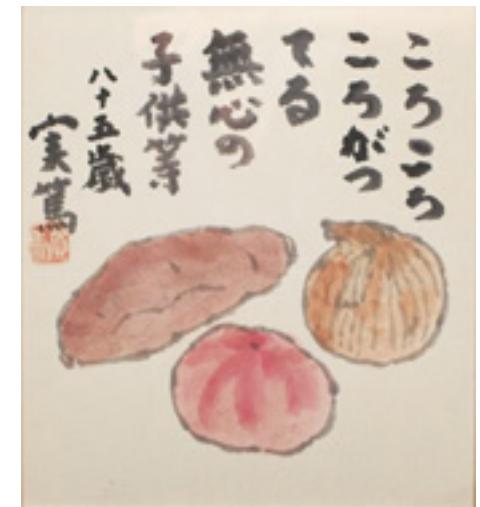


昭和14年（54歳） 安子と

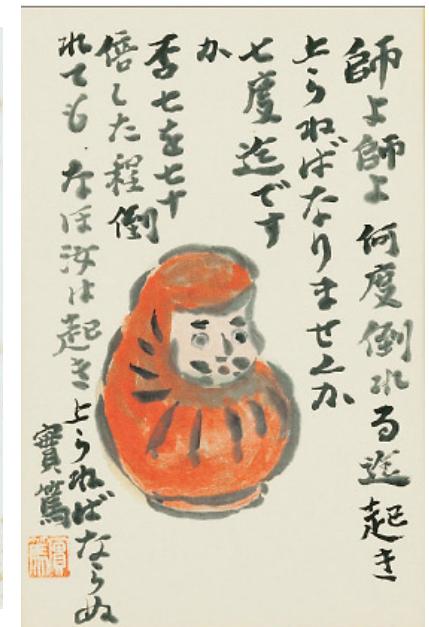


1938年（昭和13）夏、実篤53歳
伊豆の海の家で。前列左から妙子、
新子、実篤、辰子、後列右安子

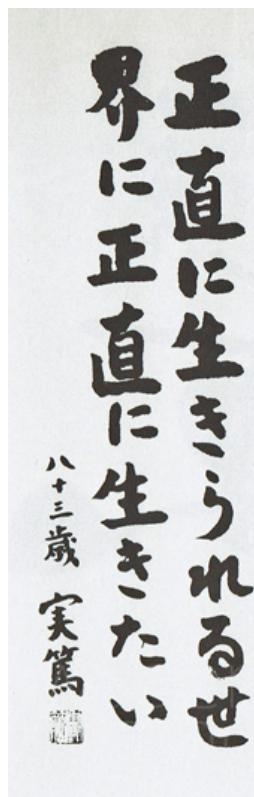




27×24 cm



印は齊白石刻。



「長い間手紙を書いた事はない。いつも元気に言いたい事を言っていた。
手紙をかくと言う事はおかしい。この頃はお前の事を考えるとまづ頭の中に涙がうかんでくる。悲しい涙ではないが、涙は自とうかんで、お前は元気にしていてくれるだろうと思う。僕も元気に、お前の事を考える事にし、ふたりはいつも楽しい気持ちで勇気づけ、楽しい事を考え、いつも笑って話したい……少しずつ賢くなり身体大事にし勉強して生きてゆきたい。僕は君を信用し二人で進んでゆきたいと思つ」（昭和48年6月、病気で入院した安子夫人へ宛てた実篤88歳のラブレターカラ）

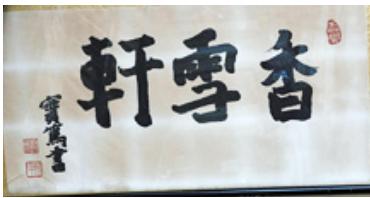
「房子は、貧しさに耐えて生活している
（実篤の死後、週刊誌に載った房子の談話から、昭和51年、房子83歳の時）
「房子は、貧しさに耐えて生活している
村民たちを知りながら、高級化粧品を使
い。ほとんど働かず、村の若い男たちと
天気な理想主義とかいう意味の、からか
いや嘲笑を意味した」（関川夏央『白樺
たちの大正』あとがきより）

「長い間手紙を書いた事はない。いつも元気に言いたい事を言っていた。
手紙をかくと言う事はおかしい。この頃はお前の事を考えるとまづ頭の中に涙がうかんでくる。悲しい涙ではないが、涙は自とうかんで、お前は元気にしていてくれるだろうと思う。僕も元気に、お前の事を考える事にし、ふたりはいつも楽しい気持ちで勇気づけ、楽しい事を考え、いつも笑って話したい……少しずつ賢くなり身体大事にし勉強して生きてゆきたい。僕は君を信用し二人で進んでゆきたいと思つ」（昭和48年6月、病気で入院した安子夫人へ宛てた実篤88歳のラブレターカラ）

「（白樺派みたいだね）といえば、甘い
とか、お坊っちゃんの人好しどと、能
天気な理想主義とかいう意味の、からか
いや嘲笑を意味した」（関川夏央『白樺
たちの大正』あとがきより）

「武者小路には俗っぽいところがない
の。純粹なの。だから人間的欲望に対し
ても純粹なのね。男性が女性を求めるの
は、おなががすいたときゴハン食べるの
と同じ。でも、女性を求めるのは肉体的
条件でしょ。動物的生活は死んでしまえ
ばなくなるけど、思想は死ないわ。わ
かりにくいかもしれないけど、永遠を信
じているのよ。私は。ずっと離れていた
けど、誰よりも武者小路を理解していた
つもりなの。おかげで賢くなつたわ。精
神的に豊かにしてくれた。何ともいえな
い温かい人なの。そばにいるだけで、お
火鉢のように温かさを感じる人なの。だ
からこそ無責任なこといつたりしても、
誰にも恨まれなかつたのよ。ドンキホー
テみたいな絵を描いて、ノウノウと売つて
ても、みんなが認めてくれたの。小学生
みたいな絵を描いて、ノウノウと売つて
も、みんな絵がまずいつていわなかつた
の」

（房子は、貧しさに耐えて生活している
（実篤の死後、週刊誌に載った房子の談話から、昭和51年、房子83歳の時）
「房子は、貧しさに耐えて生活している
村民たちを知りながら、高級化粧品を使
い。ほとんど働かず、村の若い男たちと
天気な理想主義とかいう意味の、からか
いや嘲笑を意味した」（関川夏央『白樺
たちの大正』あとがきより）



実篤書 扁額「香雪軒」
三条通河原町東入ル 筆屋



実篤書 濡額「亀屋良永」
寺町通御池角の菓匠



実篤書 扁額「鍵善良房」
東山区祇園町北側 和菓子屋

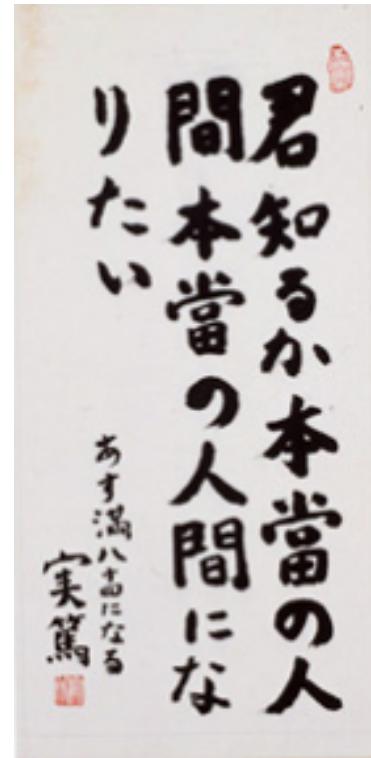


揮毫中の実篤



実篤書：昭和 45 年 11 月、病床に
あつた志賀直哉から所望されて
書いて贈ったもの。
志賀直哉はこれを枕元に置いて、
眺めながら亡くなったという。

直哉兄
この世に生きて君とあい
君と一緒に仕事した
君も僕も獨立人
自分の書きたい事を書いて来た
何年たつても君は君僕は僕
よき友達持つて正直にものを言う
笑にたりし二人は友達
昭和四十五年十一月十五日
実篤



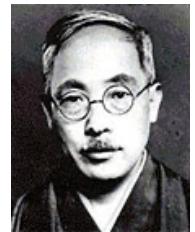
実篤書 1969 年（昭和 44）84 歳 各 68.3×33.5 cm 玉川大学教育博物館蔵



埼玉県入間郡毛呂山町にある、新しき村（東の村）の入口

「いちばん端的に全力を出し切れる仕事は字をかくことだ。…字ではやはり、鄭道昭のことを思う。しかし真似しようとは思わない。字の形が好きと言うよりも、精神、その人の心の持ち方が好きなところである。…心の質と量が書には露骨にあらわれる。…もつとも誰でも字を書けない。それが表現出来るまでにはたいして苦労がいる。いい書はその苦労に打ち勝つべきである。…その人の質と量が出るわけでは万人に優れている。だから貴いのである。自分はまだまだだが、しかし一心に字をかく呼吸はいくらかのみこんでいる内にそこまでゆけるだけ、行つて見たいと思う。…眞の書家はやはり、自然を友にし、天地を友にする人でなければならない。人事は人間の心を大きくはしづらない。そして落ちついて字をかくにはうるさすぎると。…」
(実篤「書のこと」より)

「いちばん端的に全力を出し切れる仕事は字をかくことだ。…字ではやはり、鄭道昭のことを思う。しかし真似しようとは思わない。字の形が好きと言うよりも、精神、その人の心の持ち方が好きなところである。…心の質と量が書には露骨にあらわれる。…その人の質と量が書には露骨にあらわれる。…もつとも誰でも字を書けない。それが表現出来るまでにはたいして苦労がいる。いい書はその苦労に打ち勝つべきである。…その人の質と量が自ずと出る。…しかもそれが万人に優れている。だから貴いのである。自分はまだまだだが、しかし一心に字をかく呼吸はいくらかのみこんでいる内にそこまでゆけるだけ、行つて見たいと思う。…眞の書家はやはり、自然を友にし、天地を友にする人でなければならぬ。…人事は人間の心を大きくはしづらない。そして落ちついて字をかくにはうるさすぎると。…」
(実篤が扁額に書いた言葉)



安田靉彦
やすだゆきひこ

1884年（明治17）2月16日～1978年（昭和53）4月29日（満94歳没）

日本画家（やまと絵を基礎にした歴史画の大家）、能書家（良寛の書の研究家）、

安田松五郎・きくの四男として東京都日本橋新蔵町（現、人形町一丁目）に生まれる。

同年10月母きく死去。本名・安田新三郎。実家は料亭「百尺」。

1894年（明治27）10歳、7月25日、日清戦争勃発。

1895年（明治28）11歳、11月30日、日清戦争終結。台湾・澎湖諸島植民地に、朝鮮は大韓帝国として独立。

1896年（明治29）12歳、私塾甲津学舎で『四書』や『日本外史』を学ぶ。体が弱く、病気がちだった。

8月、父松五郎が死去。店を父の友人に譲り、一家は下谷区上根岸御院殿へ引越す。

年末頃、病弱で休みがちだった、日本橋区有馬小学校高等科3年を退学。



小堀鞆音

1897年（明治30）13歳、帝室博物館で法隆寺壁画の模写や飛鳥天平彫刻の模造、日本絵画協会の展覧会で横山大觀や小堀鞆音らの作品を見て感動し、画家になることを決意。

1898年（明治31）14歳、日本画家小堀鞆音に入門。門下生らと紫紅会（後、紅兒会に改名）結成。

岡倉天心、東京美術学校を排斥され校長を辞職。

10月、日本美術院創立、第一回院展開催される。院展に「家貞」を出品。

雅号、靉彦は、師、鞆音の師川崎千虎がつけてくれた。

1901年（明治34）17歳、4月、東京美術学校に入学したが、教科内容に失望して晚秋には退学した。

1902年（明治35）18歳、1月、「歴史画風俗画研究会」に参加。

1904年（明治37）20歳、2月8日、日露戦争勃発。

1905年（明治38）21歳、集古会に入会。9月5日、日露戦争終結。

1906年（明治39）22歳、日本美術院、茨城県五浦に移転。

1907年（明治40）23歳、7月、岡倉天心に認められ、五浦の日本美術院研究所に招かれる。10月、第一回文展に「豊公」出品し三等賞。

1908年（明治41）24歳、8月、考古学会会員となる。健康を害し、奈良より帰京。

12月、岡倉天心の勧めにより、日本美術院の給費生として奈良に留学。



岡倉天心

芳と親しくなる。

1909年（明治42）25歳、春、相原沐芳（あいはらもくほう）と親しくなる。



岡倉天心

1911年（明治44）27歳、10月、岡倉天心が見舞いに来る。天心の計らいで、



岡倉天心

原三溪（いまこうえい）の経済的援助を受けるようになる。

12月、小田原に転居。

1912年（明治45／大正元年）28歳、原三溪の古美術鑑賞の研究会「審美会」に参加、宗達光琳派の作品や、富岡鉄斎の作品などを見る。10月、第六回文展に「夢殿」を出品し二等賞を受賞。

新潟の関真次郎氏持参の良寛の書に接し感激、生涯良寛を敬慕することとなつた。

「私が書と云ふものに興味を持つやうになつたのは……始めて良寛和尚の書を見て異常の感激をあたへられた時からあります。……このときから、良寛の名は、私の心の奥に深く刻まれて、其人を知りたひと云ふ思ひが昂まりました。同時に又書と云ふものに就て知り、弘く味つて見たいと云ふ事も思ひ立ちました。……こ

とにあの書の靈妙は全く良寛の人格そのものゝ表現であると云ふ事を知つた時の嬉しさはたとへやうもありませんでした。」（晩年の安田靉彦の言葉から）



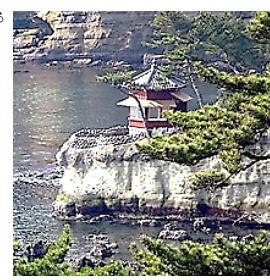
靉彦 28歳頃



原三溪
「富岡製糸場」
の経営者



靉彦 25歳



茨城県五浦の六角堂

1913年（大正2） 29歳、4月、「俵屋宗達記念会」（日本美術協会主宰で開催）宗達再評価盛り上がる。

8月、紅兎会解散。9月2日、岡倉天心没（50歳）

1914年（大正3） 30歳、日本美術院の再興に参加、以後同人として院展で活躍する。大磯町に転居。

7月28日、第一次世界大戦勃発。

1917年（大正6） 33歳、この頃から、漢、唐、宋、高麗の古陶、土偶などを蒐集する。

1918年（大正7） 34歳、5月、相馬御風『大愚良寛』出版。11月11日、第一次世界大戦終結。

雑誌『芸術』12月号に良寛の書について発表（良寛に関する初稿）。

1919年（大正8） 35歳、1月、多田いとと結婚。

国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）設立。

6月、相馬御風、佐藤吉太郎らと良寛遺跡をめぐる。

良寛が良寛遺跡を訪ねたのはこの時限りであつた。

新婚旅行を兼ねた旅だったという。

1920年（大正9） 36歳、1月から2月にかけて肺炎のため臥床する。

9月、第7回院展に「五合庵の春」出品。



鞍彦 34歳頃



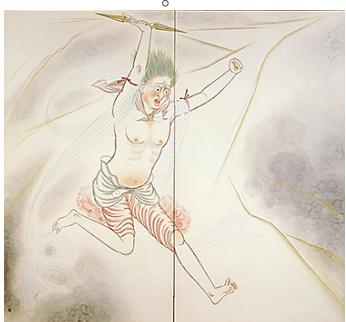
鞍彦筆「五合庵の春」1920年（大正9）
東京国立博物館蔵

「越後の国上山五合庵の良寛さまを訪れる村童達。この作品の前年六月、初めて良寛の遺跡を巡り、構想を得た。」（安田鞍彦）

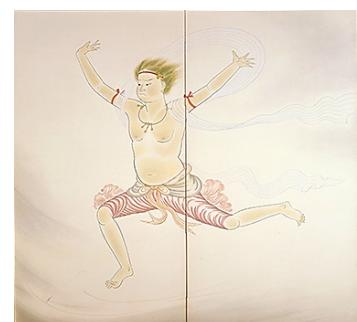
「良寛の藝術は暖かい春の光にもろもろの生物が生れ出づるやうな気持です。幽かな細い自然の囁きを聞くやうであります。細く小さくとも純淨なひびきであります。」（安田鞍彦）



五合庵にて（左から安田夫妻）



鞍彦筆「風神雷神図」1929年 2曲1双 紙本着色 各177.1×190.4cm
遠山記念館蔵



1924年（大正13） 40歳、春、大磯町小磯の鈴木別邸に移住。

岩野平三郎の紙と出会う。

1927年（昭和2） 43歳、芥川龍之介自殺。

1928年（昭和3） 44歳、11月、「良寛遺墨集」（第一書房刊）を監修。

12月、自ら設計した大磯町東小磯の新居に入る。

1930年（昭和5） 46歳、4月、ローマで開催された日本美術展に

「風神雷神図」出品。



鞍彦筆「花づと」1937年 個人蔵

「構図は・・・精練充実され居なければならぬ。然しそれは画面を充填せしめて余白を余さぬと云う訳ではない、意想の充実である。・・・何物も描かれざる処に却つて深い意味があり、それが全幅の生命を握つて居る場合が多い。」（鞍彦）

A traditional Chinese ink painting of a plum blossom tree. The composition features a dark, gnarled tree trunk on the right side, with several thick branches extending towards the left. The branches are intricately drawn with fine, expressive lines, some of which bear delicate white blossoms. The background is a soft, light beige wash, creating a sense of atmosphere and depth. In the bottom right corner, there is a small, rectangular calligraphic inscription.

鞍彥筆「春曉」1935年 紙本彩色 62.3×82.3 cm

(新文展) 審査員となる。12月、南京虐殺事件。
ドイツ人ヤコブ・フイツシエル、英語版『蓮の露』
はなずのつゆ刊行。



鞍彦筆「月の兔」部分 1934年
愛知県美術館蔵



馮彦筆「菖蒲」1931年
京都國立近代美術館藏

3月23日、ドイツで、全権委任法成立。
10月、「宗達展」を観て一層感銘を深くする。

9月18日、滿州事変勃発。

A traditional Japanese ink painting of Mount Fuji, showing its snow-capped peak rising above layers of misty mountains.



馮彦筆「生成」1931年

「宗達は古典の中から、新しい美を発見してこれを高く示したのであります。宗達の絵の特色は一般には裝飾表現に重きをおきますが、あの立派な装飾化の根元は鋭い写実性を持つ描写力であります。」

1938年（昭和13）54歳、1月、茶道を習い始める。朝日新聞社主催

「戦争美術展覧会」の作品選定にあたる。

鈴木大拙、良寛の、「盜人にとり残されし窓

1939年（昭和14）55歳、6月、法隆寺壁画保存調査会成り、

その委員となる。

9月1日、第二次世界大戦勃発。

の月」を英訳して海外に紹介。

1940年（昭和15）56歳、11月、紀元一千六百年奉祝美術展に「黄瀬川

陣／義経」出品。翌年右隻「頼朝」完成。

秋から法隆寺金堂壁画模写始まる。

1941年（昭和16）57歳、12月、第1回野間美術賞受賞。

12月8日、真珠湾攻撃。

1942年（昭和17）58歳、1月、昭和16年度朝日文化賞を贈られる。

2月、日本美術院軍用飛行機献納同人作品展

に「重盛」「水仙」出品。



卷紙に揮毫中の鞆彦
昭和17年6月4日



鞆彦書「為建一・忍・鞆彦・新(朱文印)」昭和18年
年絹本 5.4×10.8 cm
建一氏(鞆彦の子息)
の出征時、守袋に入
れておくつもりで、小布
に書いてもらったもの。

に「益良男」出品。

7月、海軍省から山本五十六聯合艦隊

司令長官の肖像制作を依嘱される。

9月、第5回新文展審査員になる。

10月、満州国建国十周年慶祝絵画展に

「鑑真和尚」出品。

1943年（昭和18）59歳、4月と12月に法隆寺壁画模写監督の

ため奈良へ行く。

1944年（昭和19）60歳、2月、戦艦献納帝国芸術院会員美術展に「豊太閤」など出品。6月、東京美術学校教授となる。

1945年（昭和20）61歳、7月、山中湖畔に疎開。8月15日、玉音放送。

1946年（昭和21）62歳、6月、国宝保存会委員となる。

文部省主催日本美術展覧会（第1、2回日展）

審査員となる。この頃、宗達の研究を続ける。

1947年（昭和22）63歳、7月、正倉院評議会会員となる。

11月、東京国立博物館評議会会員となる。

「東洋芸術の深奥を最もよくあらわしたことばとして、
大巧は拙なるが若し（老子）と、氣韻生動」ということば
があります。まず老子の言は、非常に巧みなものが土台
にあって、拙なるものが生まれる。拙といつても、大巧
に対して大拙と言いたいもので、その典型として、絵で
は宗達、書では良寛がその代表にあげられます。」（安田
鞆彦『美のこころ』対談録、1964年1月）



鞆彦筆「王昭君」1947年 88.0×55.3 cm

「東洋芸術の深奥を最もよくあらわしたことばとして、
大巧は拙なるが若し（老子）と、氣韻生動」ということば
があります。まず老子の言は、非常に巧みなものが土台
にあって、拙なるものが生まれる。拙といつても、大巧
に対して大拙と言いたいもので、その典型として、絵で
は宗達、書では良寛がその代表にあげられます。」（安田
鞆彦『美のこころ』対談録、1964年1月）

「宗達の仕事は、それまで眠っていた古典に新しい生命
を与えたものである。・・・宗達の拓いた新天地は、わ
が日本人のみが持つ美的感情を、絵画の世界に、始めて
新しく、純粹に、示現させたのである。」（安田鞆彦）



黄瀬川陣 挥毫中の鞆彦
1941年56歳ころ



鞆彦筆「黄瀬川陣」1941年 六曲一双屏風 右隻／頼朝各 166.8×370.8 cm
左隻は義経 東京国立近代美術館蔵 戦争協力画として描かれたという。

1948年（昭和23）64歳、2月、川端康成全集（新潮社版）の表紙装画の制作開始。

1949年（昭和24）65歳、1月、法隆寺火災、金堂壁画焼失。11月、宮中

で御進講、題『岡倉天心先生について』。
これが翌年「宗達について」という文章と成る。

12月、東京藝術大学で宗達について講和し、
11月3日、文化勲章を受領。

1950年（昭和25）66歳、6月25日、朝鮮戦争勃発。

12月、文化財専門審議会の専門委員となる。
11月、東京藝術大学教授を辞任。

1951年（昭和26）67歳、5月、東京藝術大学で『氣品について』講義。

7月、国立近代美術館設立準備委員に。

1953年（昭和28）69歳、7月27日、朝鮮戦争、一応終結。

1954年（昭和29）70歳、11月、文化財専門審議会専門委員を辞任。

1955年（昭和30）71歳、11月、ベトナム戦争勃発。

11月、東京藝術大学教授を辞任。



鞍彦筆「良寛和尚像」1956年
良寛生誕200年記念に出雲
崎町の良寛記念館に収めた
もの。

1958年（昭和33）74歳、5月、日本美術院の理事長に就任。

1959年（昭和34）75歳、1月、『歌会始の儀』の召人に、勅題『窓』

を詠む。文化財専門審議会専門委員を辞任。

1960年（昭和35）76歳、12月、筑摩書房版『良寛』を監修。

1960年（昭和35）新東宮御所のために「富士朝陽」を制作。

1964年（昭和39）80歳、11月、谷崎潤一郎新々訳源氏物語の装幀。

「良寛和尚の書から最初にうけるものは、きわめて素直な線質のよさである。それがのびのびとどこに造型されて、純粹に、書というものの美を示してくれている。・・・楷書には、往々褚遂良に近い味が見られるが、細字は日本の古金石文の如きかおりがある。六朝書の瘦鶴銘に接してから、書風が更に豊潤に、また古調を加えたこととおもわれる。飴屋の看板の如き、大字のものに十分それがうかがえる。・・・良寛に自作の手毬が一つある。白糸で作られた小さな毬で、赤青黄で・・・ジグザグの線があしらわれ、その新鮮さは、まさに前衛派の絵である。歌に詩に、いまも身近くわれわれにせまる近代性が称えられているが、それは良寛が生んだすべてのものに通ずる特性である。」（鞍彦「良寛の藝術」から）



鞍彦筆「飛鳥の春の額田王」1964年
滋賀県立近代美術館蔵

1965年（昭和40）81歳、5月、大磯町名譽町民に。

6月、東京芸術大学名誉教授となる。

1968年（昭和43）84歳、晩春、新宮殿の万葉集和歌執筆完了。

11月、法隆寺金堂壁画再現模写完了、落慶法要

を行う。金堂壁画再現記念法隆寺幻想展。

川端康成、ノーベル文学賞受賞。



鞍彦 1967年 82歳



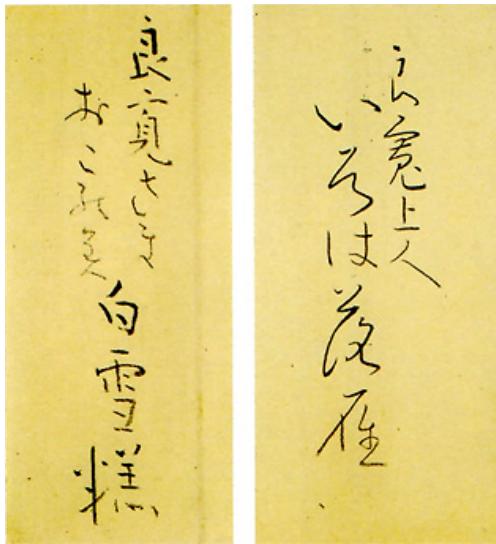
良寛遺愛の手まり



鞍彦筆「良寛貞心尼の図」紙本墨淡彩
良寛記念館蔵



鞍彦と川端康成 1950年6月
鞍彦65歳、康成50歳頃 大磯

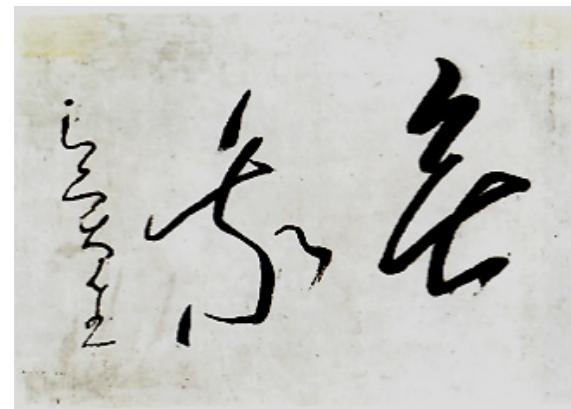


鞍彦筆 「良寛上人 いろは落雁」(右図)

「良寛さまおこのみ 白雪糕」(左図)

「…静に全幅を観て居りますと、字字の間に起る律動が次第に大きな破調をゑがき、飄々として心のままなる線のゆきかひが、あやしく美しき統一を以てをはってゐるのを觀らるるであります。」(良寛の草書幅を見て、鞍彦)

(昭和29年、安田鞍彦「書を想ふ」から)
鞍彦筆 「良寛上人 いろは落雁」(右図)
「良寛さまおこのみ 白雪糕」(左図)



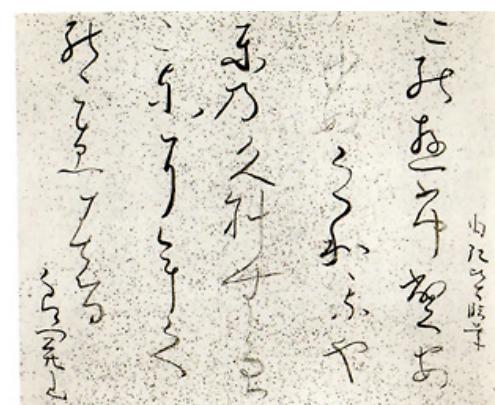
良寛書「無我」

「良寛の書は、更にその人柄と行迹によって浄化されてゐる。なんの気取りもない、まったく庶民的な気安さ、人間的な温かさが、その叡智を包んで、おのづから流露するところの芸術であって、一見稚拙に似て、その奥に無類のうまみを持ち、高い格調を持つ書は他に見られないものである。」(安田鞍彦「良寛の藝術」から)

1970年 (昭和45)	86歳、三島由紀夫自決。
1971年 (昭和46)	87歳、唐木順三『良寛』刊行。
1972年 (昭和47)	88歳、川端康成ガス自殺。
1974年 (昭和49)	90歳、前年から、薬師寺金堂薬師三尊の光背制作監修に携わる。
1975年 (昭和50)	91歳、4月30日、ベトナム戦争終結。 7月自筆歌集『高麗集』刊行。
1978年 (昭和53)	94歳、4月29日、心不全のため永眠。

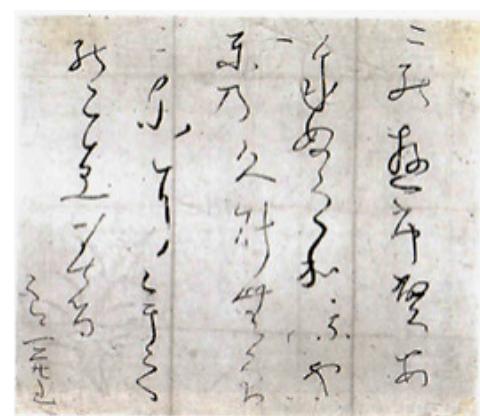


鞍彦筆「卑弥呼」1968年 滋賀県立近代美術館蔵

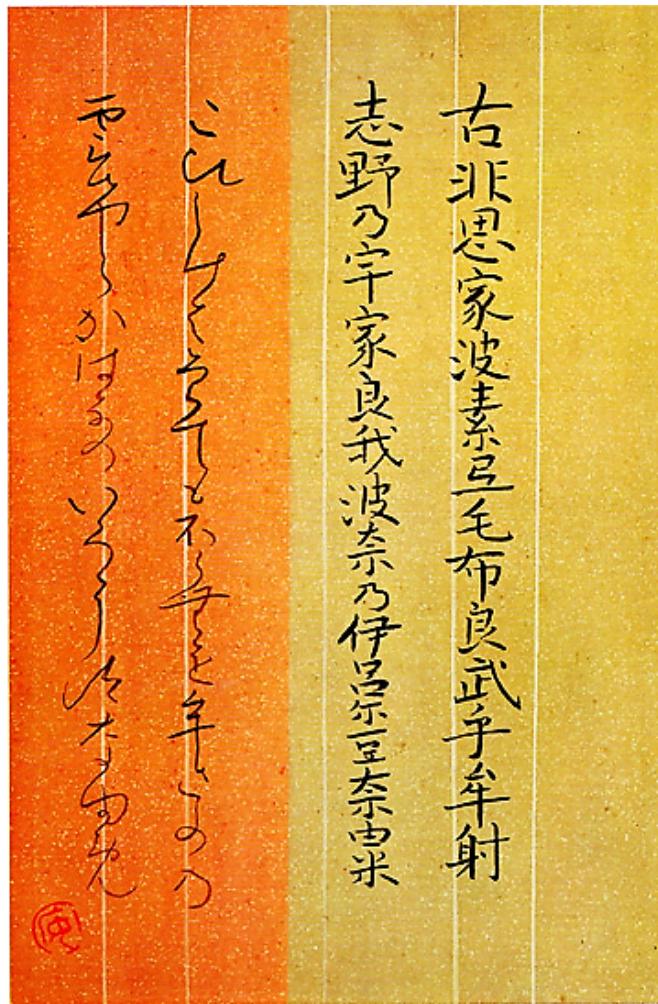


「良寛のこのゆふべ」鞍彦臨書 1969年 紙本
白地に金砂子の料紙 19.0×23.0cm

臨書として唯一残っているもの。

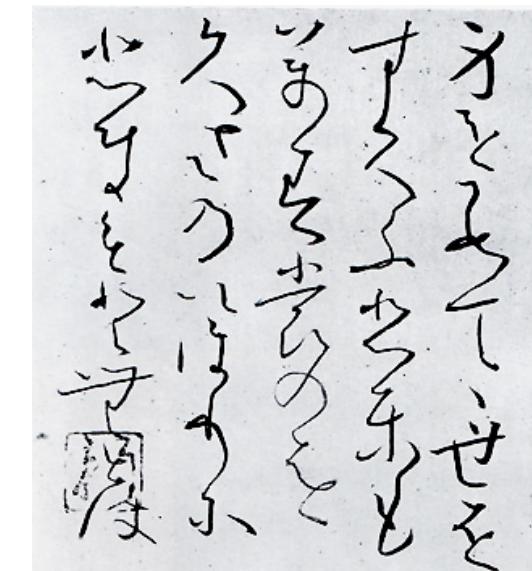


良寛書「和歌一首・このゆふべ」大色紙
紙本 19.9×22.7cm ()は脱字
このゆふべ秋(は)(來)ぬ(ら)しわが
宿の草むらごとに虫の声する良寛書



鞍彦書「万葉集和歌」1970年 85歳 紙本 31.0×20.3 cm
こひしけばそでもふらむをむさしののうけらがはなのいろにづなゆめ
安(朱文印)

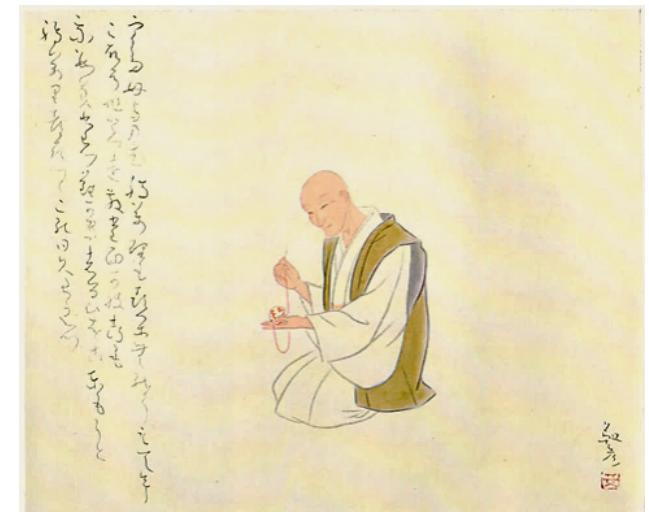
新宮殿の万葉和歌染筆のあと、そのとき使用した料紙を用いて書かれたもの。万葉集卷14、東歌の相聞の一首を真名と仮名で書かれている。この特製の料紙は、麻紙に着色したもので、ここでは黄土と茶色の色替りに金砂子。5本の金線が引かれている。これは字の中心を揃えて、行を真直ぐ書くためのものである。



鞍彦書「良寛の歌・身をすべて」紙本、黄色の料紙、
12.7×11.5 cm
身をすべて よをすくふひとも ますものを
くさのいほりに ひまもとむとは

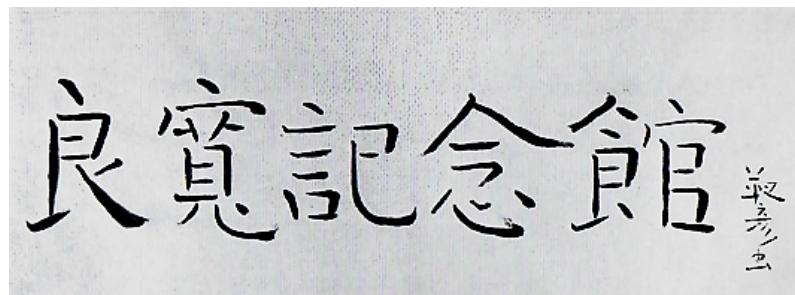
(昭和29年、安田鞍彦「書を想ふ」から)

私は古筆の中には、線のうるはしさの極地に達してゐるもののが、少なからずあることを認めるけれども、良寛の書も、古筆の名品に伍して、その天分のうまさでも劣らないものがあるとおもふし、それに、あの童心のやうな素直さと、人間的な温かみ、庶民的な親しみは、貴族的な古筆に求められないもので、然も気品のある、小楷の如きは高古の匂ひ高いものがあるとおもふのである。」

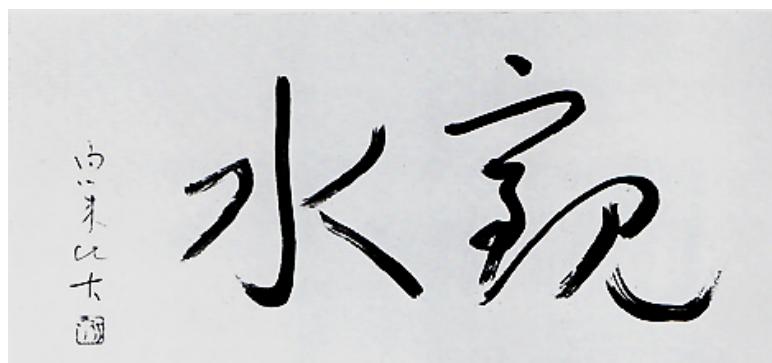


鞍彦自画贊「良寛和尚像」1947年 紙本彩色 47.2×57.0 cm
(贊) うたもよまむ てまりもつかむ のにもでむ
こころひとつをさだめかねつも (貞心尼の歌への返歌)
かすみたつ ながきはるびに こどもらと てまりつきつつ このひくらしつ 鞍彦 (落款) 安 (朱文印)

「やはり大正元年だった。・・・始めて田中親美さんにお遭ひした時、書を習ふには、先づ手本は何を選ぶべきかをお訊ねしたら、言下に王羲之ですといはれた。私は感服した。それは、その頃の書を指導する本には、書聖王羲之を学ぶには、先づ歐陽詢その前に孫過庭、又その前に弘法大師其前・・・と言った工合に、面倒なこと夥しいが、遠がに田中さんは、古画などに対するお説も新らしく・・・その時の一言の教へはいつまでも忘れないものである。・・・水木十五堂先生は、大和の国史古文化の研究で学界には重んぜられてゐた方だった。・・・大正十年頃・・・久々でお遭ひした。・・・良寛の書と言ふのを見せてほしいと言はれるので、先づ屏風を展げた。・・・良寛は脱俗の、ただおもしろい書とばかり思つてゐたが、これは実に正しい書だ。と言はれ、難解で有名な良寛詩の草書を、朗々と次々に読まれていった。・・・当時良寛の書を好んだのは、画家や文士歌人の一部に過ぎず、書道研究家などには理解される人が少なかつた時なので、私は非常に嬉しかつたのである。此時分から、上代の古筆も好きになり、偶然に、伝公任の大色紙を・・・手に入れた。・・・私は古筆の中には、線のうるはしさの極地に達してゐるもののが、少なからずあることを認めるけれども、良寛の書も、古筆の名品に伍して、その天分のうまさでも劣らないものがあるとおもふし、それに、あの童心のやうな素直さと、人間的な温かみ、庶民的な親しみは、貴族的な古筆に求められないもので、然も気品のある、小楷の如きは高古の匂ひ高いものがあるとおもふのである。」



鞍彦書「良寛記念館・鞍彦書」紙本 32.0×60.5 cm 記念館は昭和 31 年に開館した。

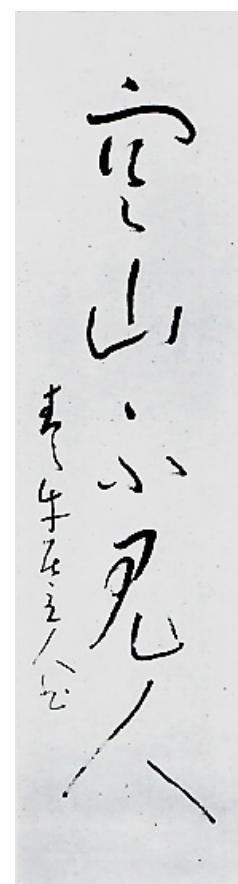


鞍彦書「観水・由幾比古」1970 年 85 歳 紙本 27.4×59.6 cm 観水は兄の号。

「中国の書は……晚唐から宋以後の書はおしなべて好まない。……六朝の書は好きである。……六朝の書とは普通北魏の書を言ひ……個性的で型に嵌らないこと、神経の太さが後世人間と隔絶してゐることが特色であり、恐ろしく粗野な感じを持ちながら、然も調子の高さを失つてゐない。絵画彫刻其他にも共通した古代人だけが持つてゐるはかり知れないと秘密である。南朝のものは王羲之を含めて大体に柔かである。瘞鶴銘とか謝靈運の書などが私は好きである。……隋から初唐へかけての書は、羲之風の正格で、端正で氣品が高く、歐陽詢が代表してゐる。……私は褚遂良の、極めて自然な雅味のある筆致が好きである。……顏真卿の書は肉太で堂々としているが、いはゆる書師の習氣ありで、品位にかけられ。……宋元の書では、禅僧の墨蹟が最も精神の充実を示し、……書の美を發揮した点で最も貴重なものといへる。(昭和 29 年、安田鞍彦「書を想ふ」から)



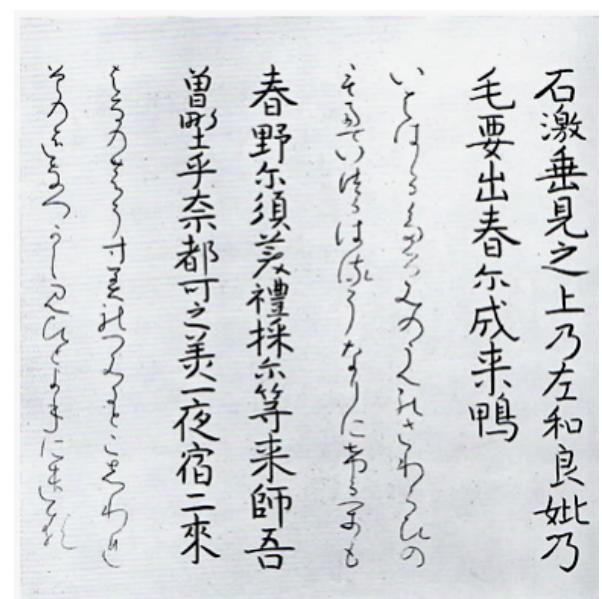
鞍彦書「客来茶当酒・青牛居」
紙本 130.5×31.9 cm



鞍彦書「空山不見人・
青牛居主人書」
紙本 116.5×30.5 cm



皇居の千草・千鳥の間



鞍彦書「新宮殿千草の間の万葉集和歌」部分 1968 年 83 歳

いは
石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりに
けるかも (志貴皇子 卷八)

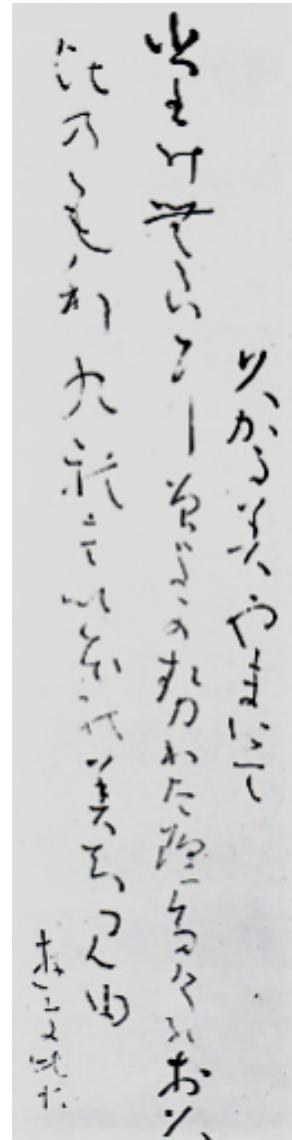
ひとよ
春の野に葦つみにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜ねに
ける (山部赤人 卷八)

皇居の新宮殿は昭和 43 年 11 月に完成された。この
宮殿の千草の間の床飾りは、御物 桂 宮本万葉集を開
けた様を想定し考えられたという、その和歌の揮毫を
鞍彦が依嘱された。

全面の寸法は豊 60 cm、横 612 cm で、撰歌、校訂は久
松潛一。草花と鳥に因んだ歌各十首ずつを、色替りの
料紙十枚に二種ずつ、真名と仮名で書かれている。

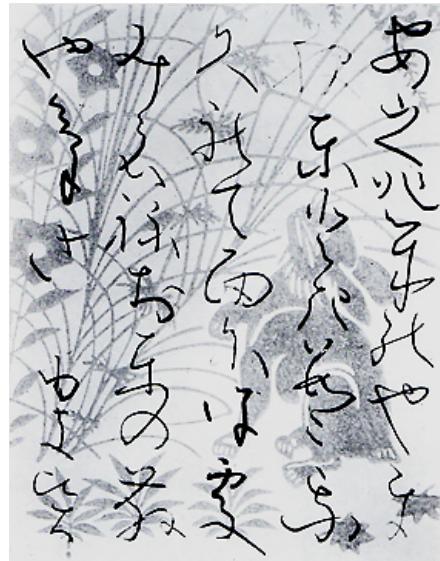
特製の料紙作りは縣治朗が担当、麻紙を茶・白・黃・
橙・赤などに着色し、金砂子を施している。

久駕美やまにて たけむらにそよかぜわたりたけのおくひのもりくればいほのみちみゆ 遊支比古



鞍彦書「久駕美山にて」
紙本 135.0×33.2 cm
良寛の遺跡を巡った際の歌。

あしひきのやまほととぎすこがくれて
めにこそみえねおとのさやけさ 由支比古



鞍彦書「源実朝の歌」紙本 13.8×10.9 cm
薄茶地に兎と秋草模様の唐紙に書かれている。

「良寛は・・・正鋒を用ゐ、側筆のものは少なく、いつもゆっくりと筆を運んでゐる。勿々の手紙にも走り書きがない。字を消したりする場合にもあわてて棒を引いたりしない。字と同じやうな、しづかな線または弧線がおもしろく引かれ、それがために全体の調和が破られない。良寛の感覚がこまやかで、心の動きがいつも平静であることがわかる。」

「良寛の芸術的天分の豊かさには感心します。また芸術的理解の深さにおどろきます。全幅が一つの立派な線の構成であると思ひます。線の節奏、墨の分量、布局等に実に透徹した理解を見ます。」

「大正八年六月・・・遺跡めぐりをした。ゆかりのある旧家の人々はもとより、宿屋のお婆さん、人力車夫のやうな人々の間にも、当時まだ一般には有名でなかつた百年前の人を、いかにも親しげに、良寛さま良寛さまといつて語られるを聞いて、心暖まる旅をした思ひ出を忘れることができない。」

「芸術は人格の表現である。幾多の伝記よりも一個の遺作が能く其の全人格を表白する。」(安田鞍彦)



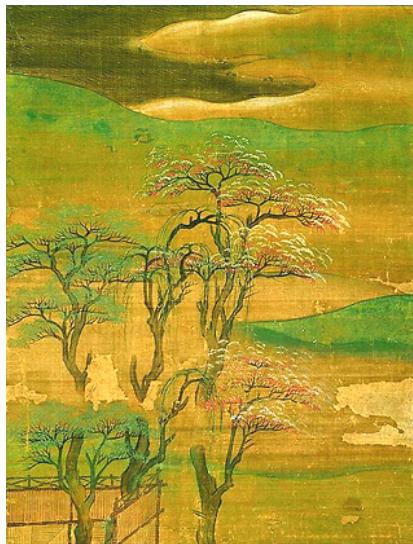
鞍彦自画贊「鎌倉右大臣」1946年 61歳 紙本彩色
26.8×23.9 cm 源実朝像と贊は実朝の歌。
けさみればやまもかすきてひさかたのあまの
はらよりはるはきにけり 鞍彦 新(朱文印)



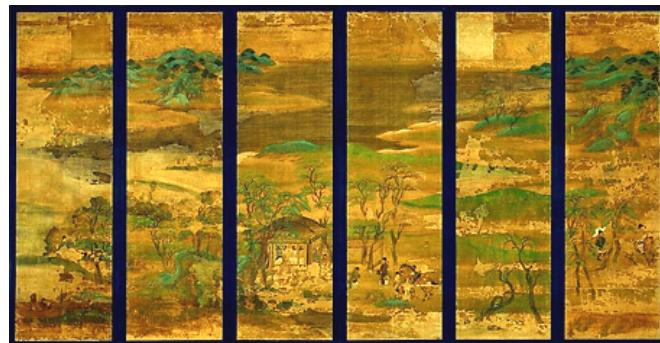
鞍彦画「椿」

「日本人は元来、調子の高い澄みきつたものを好みます。それは天平あたりの彫刻を、中国のそれと比べればわかります。その理由の一つは、どこの國の人よりも、手先の働きが巧みな為です。・・・絵画ならば、幾本の線で現したものよりも、その中の決定的な一
本の線で現したものをおびます。」(鞍彦)

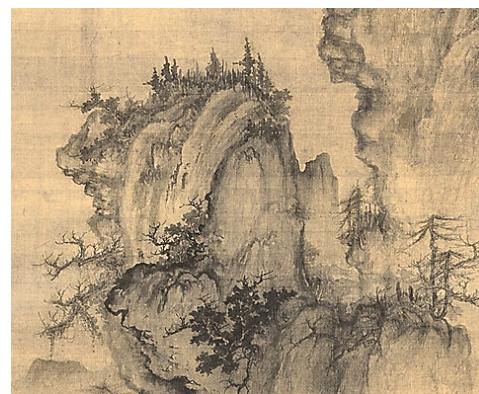
「聖徳太子筆法華經義疏は、・・・古調の名筆である。義之以前の、漢の隸体をふくむ古様の中に、すでに和風とも言ふべき特徴も感ぜられ、高古幽湘、既存の肉筆書中最も調子の高い名蹟といへる書で、・・・聖徳太子といふ偉人の呼吸に触れるおもひがするのである。・・・和風の發生は、絵画彫刻工芸と歩調を一にし、書では道風から著しくなつてゐるが、私は道風、行成などの、楷行の和風は好まない。然し、稿本や手紙のやうなくだけたものは別である。玉泉帖は縦横無礙の快筆で、・・・佐理の消息・数通も極めて自由無碍な快筆である。醍醐天皇と伝へられる白詩断簡を・・・拝見したが、玉泉帖よりも、更に放膽無類の巨蹟で、然も格調高く・・・張旭、懷素以上の書であろう。・・・書も自分で書けば書くほどむづかしいが、書はいいものである。殊にいい書を見るのは楽しい。昔の偉い人間の呼吸に触れることが出来るのは、書のみが持つ功徳である。」(昭和29年、安田鞍彦「書を想ふ」から)



「東寺山水屏風」部分 京都国立博物館蔵



「東寺山水屏風」平安時代後期（11世紀）絹本 各扇 146.4×42.7 cm



郭熙「早春図」部分 台北、国立故宮博物院蔵
郭熙は北宋の山水画家。11世紀の画家。

「東寺山水屏風」に描かれた人物は白楽天らだと考えられ、これらは唐絵であり唐風だが、風景の山・水・樹木や人物の一部などは温和でやわらかく、静かな情緒が感じられ、日本の自然が描かれ、和様化の傾向がはつきりと見られる。

郭熙の山水画と比較すると、その感性の違いがよく分かる。

『源氏物語』（帚木、雨夜の品定め）には平安後期の絵画観が語られており。

郭熙の山水画と比較すると、その感性の違いがよく分かる。

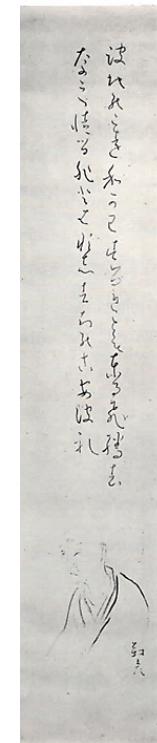
『源氏物語』（帚木、雨夜の品定め）には平安後期の絵画観が語られており。

私は決めています。・・・』（源氏物語・帚木）与謝野晶子訳

やまと絵は、大和絵、倭絵、和絵などとも表記される。飛鳥・奈良時代に中国から伝来した絵画を唐絵と言い、それは中国の風景や風俗などを主題とした絵画であった。平安時代中期（10世紀初め頃から）、国風文化の発展にともない、日本の風景や風俗や人物を主題にした障屏画などで、やまと絵が発達する。鎌倉から室町時代にかけ、宋元画が、禅とともに伝えし流行する。これらの中国風の絵画を漢画と呼ぶ。室町から江戸時代にわたり、やまと絵は土佐派に受け継がれ、桃山から近代にかけ、俵屋宗達から尾形光琳（琳派）へと継承された。



鞍彦画「紅白椿」1964年 79歳
滋賀県近代美術館蔵



「天平人の宗^{そう}とした、王羲之や歐陽詢、褚遂良はいうまでもないが、私は鄭道昭、張猛龍や石門銘等、いわゆる六朝風が好きである。草仮名では、日記中の歌をかいた仮名、高野切れ乙種の源兼行の書を参考にした。良寛は古筆の一片を見ていながら、草仮名に就てもややいい解釈を持つていることに改めて感心し又参考になつた。」（鞍彦）

「品位は絵画の各要素の調和の完美にあるとも云へるが、背後に潜在する作家の人格と感情の高さによって靈妙な力を現はしうるのである。」（鞍彦）

贊 はちのこをわがわするれどもとのひとは
なしとるひとはなしはちのこあはれ

鞍彦

鞍彦筆「良寛像」
紙本墨画
131.7×26.3 cm